コリャークの伝統的命名方法における再生観念とその変容

富山大学人文学部
呉人惠

コリャーク（Koryak）は、シベリア北東端、オホーツク海を挟んでカムチャツカ半島からその対岸にいたる海岸地域ならびに内陸地域に居住し、主にトナカイ遊牧や漁労に従事している。本研究では、内陸地域に居住するトナカイ遊牧民コリャークの新生児に対する伝統的な命名方法とその根底にある再生観念、さらには近年の他民族との接触による変容について、これまでの現地調査で得たデータにもとづき言語人類学的側面から考察をおこなった。

トナカイ遊牧民コリャークは、他の地域同様、ロシア式の姓・名・父称という命名方式を公的に使っている。しかし、一方、コリャーク語による伝統的な命名もおこなわれており、それこそが「真の」名前であると考えられている。

コリャーク語による命名の根底には、死後の再生というコリャークの伝統的観念が流れており、新生児を祖先の誰かが再生したものと考え、その新生児にその故人の名前を授けるのである。これはロシア式命名方法が普及し、「アーニャペリ」という占い石を使った伝統的な命名の技術的側面が忘れかけられている現在でも受け継がれている。

すなわち、コリャークには、祖先の魂 ujijit が死後、新生児として再生するという観念があり、占いをすることにより新生児がどの祖先にあたるかを特定して、その祖先の名前を命名するのである。このような再生観念は、子供が生まれることを jet-i「彼／彼女が来た」（jet「来る」, -i 過去）と表現することにも反映されている。

占いは具体的に以下のようにおこなわれる。近隣の占いのできる年配の女性の中から選ばれた人が、命名の依頼を受けると好天の朝方を選び、静かな室内でアーニャペリを、縛った 3 本の木の結び目から吊るして、すでに故人となっている親族の名前を次々にアーニャペリに向かって呼びかけていく。もし、その名前が新生児の中に再生した祖先のそれと一致しない場合には、アーニャペリは揺れないが、もし一致した場合には大きく左右に揺れるといわれている。それにより、新生児の名前が特定される。特定された名前は、占いをおこなった女性により新生児の耳元でささやかれる。

とはいえ、現実には、アーニャペリを使って命名の占いができる女性はほとんどいなくなっている。そのため、それ以降に生まれた子供は、占いのできる老婆が住む遠隔の村に無線を使って命名を依頼することが多い。とはいえ、これも一時しのぎの応急対策にすぎず、彼女たちがその技術を次の世代に伝承していかないかぎり、いずれ完全に失われていくのは避けられない。ちなみに、エヴェンスク村のセヴェロ・エヴェンスク地区立民族寄宿学校のコリャーク語の教師、T. J. Ermorinskaja さんの話では、低学年の子供たちの多くはす

でに自分のコリャーク語名を知らず、ロシア語の名前だけが自分の「真の」名前だと信じている。彼女はそのような子供たちにコリャーク語の名前を考えてやるのだということである。

とはいえ、ツンドラの遠隔地に暮らすコリャークの人々は、新生児にコリャーク語の名前を授けるのは必須なことであると根強く考えている。ちなみに筆者は２０代の未婚の若者たちからも、もし自分たちに子供ができたとしたら、必ず誰かに頼んでコリャーク語の名前をつけてもらうつもりであると聞いた。この世代になるとコリャーク語は聞けば多少理解できるが、ほとんど話さなくなってしまっている。それにもかかわらず、こと命名に関しては、コリャーク語の名前を授けることに強いこだわりをもっていることは興味深い。そして、このことは伝統的な命名方式が失われてもなおなにか別の形で、コリャーク語による命名が少なくとも今後しばらくの間は受け継がれていくであろうことを予想させる。ひとつの可能性として指摘されたのは、夢占い、あるいは自分の知っている故人となった親族の中に、符合する人を捜し当てて命名すると言う方法である。とはいえ、かつて占いができた老婆たちが記憶していた先祖に対する知識に比べれば、現在の人々のそれは乏しく、それゆえにこのような方法もいずれは先細りになっていくことは避けられないように思われる。

このような伝統的な命名方法の喪失は、単に名前の喪失にとどまらず、その名前の背景にあるコリャークの再生観念に裏づけされた世界観の喪失、ひいては、コリャークとしてのアイデンティティの喪失を意味する。それゆえに、その喪失の意味するものは計り知れないのである。

以上見てきたように、新生児への命名という行為は、集団における新しい成員の補充という意味では社会的な環境への適応戦略であるとともに、再生観念に支えられているという意味では超自然的な環境への適応戦略でもある。まさに、言語と文化の相関性の枠組みで考察されるべきテーマ、言いかえれば、言語学と文化人類学が共有すべきテーマである。